

隙間だらけの解答用紙 〜三か年の取り組み〜

阪南市立尾崎中学校 上森 千種

一 隙間だらけの解答用紙

私が受け持った平成二十年度に入学した子どもたち。彼らが中学生として初めて受けた中間テストは、記述問題の解答欄が隙間だらけであった。作文を書かせた場合にも、「原稿用紙の使い方」「常体と敬体の統一」「文章構成」など、多くの課題が見られた。

そんな彼らに試験や作文の返却をする際は、生徒の解答に対しアドバイスを書いた上で返却することにした。また試験の後、「振り返り」として、どんなミスをしたのか、それを今後どのように克服するかを考えさせ、自分の言葉で書かせる、つまり「試験をきっかけに学習すること」を心がけさせた。

しかし、これらの課題は彼らだけに見られた課題ではなかった。あらためて平成十九年度の全国学力・学習状況調査の本校の結果を見ると、知識・技能の活用に関する問題に課題が見られた。とりわけ記述問題の無解答率

が目立った。分析すると「漢字や選択式問題だけ取り組む傾向が見られること」「すぐに答えを知りたがり、自分で考えようとする傾向が見られること」「文章を読むスピードが遅いためか、試験で問題を解く時間が足りないこと」などの課題を抱える生徒像が浮かび上がった。

本稿では、多くの子どもたちに見られるこれらの課題を克服するため取り組んだ実践を紹介する。

二 実践例

① まずは漢字から

取り組みの第一歩として、毎日、朝学活の時間に、漢字の書き取り学習を始めた。すると、試験の平均点が約十点上がった。生徒の中に「国語は勉強すればしただけ結果が出る」という意識が生まれた。「漢字は頑張る」と、漢字プリントを十数枚も提出する生徒も見られるようになった。副次的なものだが、字を

書くスピードが速くなったのは、大きな収穫だった。最初は熟語を三十回書くだけで十分かかっていたが、一ヶ月続けると半分以下の時間しかからなくなった。文章を書かせる際に「この字は漢字でどう書くん？」という質問も減った。

② 読むことに慣れさせる

中学校で国語の授業をする際に、文章を場面ごとに区切り5W1Hを押さえる方法をとることが多いようだ。だが、私は生徒に「全体を一読し的確に内容を捉える技術」を教えるようにした。文章構成やキーワードの見つけ方が理解できるようにすれば、文章のどこを重点的に読めばよいか、すぐに判断できるようになる。逆に、文章を書く際にどこに力を入れて文章を書けばよいかも見えてくる。そのために、教材と関連する資料を複数読ませ、いわゆる『優れた文章』に共通する書き方のパターンを洗い出すという作業を、KJ法等を用いて繰り返し取り組ませた。

③しつかり考えさせる

二年生からは、記述問題を解く力を伸ばすことに力を入れた。それまでは、導入で前時の復習をし、本文を音読して内容を整理し、最後にヤマとなる中心発問を掲げていた。しかし、この方法だと、話が盛り上がってきたところで時間切れということが多かった。そこで、初めに思考力を問う問題を提示し、クラス全体で意見を出し合い、前時の内容をヒントとして挙げながら、じっくりと謎解きをするようにした。

また、初めのうちは、生徒の発言の中でよいと思われるものだけを板書していた。すると、「どうせ先生が最後に答えを書くから、それまで待てばいい」と、何も考えようとならない生徒がいることに気づいた。そこで、生徒から出てきた、正しいかどうかかわからない発言を、あえて話し言葉のまま黒板に書くようにした。そして、「この意見をさらに高めるにはどうすればよいか」と問い直し、意見を募った。こうして、単語を付け足し、不必要な言葉に×をつけ、思考プロセスを視覚化するようにした。生徒は正答を書くかと思うと気負ってしまい、逆に何も書けなくなってしまうがちである。ところが、自分以外のどれかの答えを推敲していくぶんには、のびのび発言できるようだった。

④作文問題に挑戦させる

生徒の書く力をもう一段階押し上げようと、百五十〜二百字程度の作文問題を、毎回の定期試験で、百点中配点十点で課すようにした。その際、作文問題の題と条件、採点基準を示しておいた。すると、確実に得点に結びつくようになる。漢字に加えて作文で点数が上がりだしたことで、生徒の国語に対する苦手意識が段々と薄れ、得意科目に変化し始めた。ちなみに、生徒が最も意欲的に取り組んだ作文の課題は、「履歴書の志望動機欄を書こう」というものだった。

⑤活用力を養えるように

肝心の「活用する力を問う問題」については、「大阪府学力テスト」の問題を参考に取組んだ。これを小学校四年生用の問題から順に中学校三年生の問題まで、家庭学習課題に編集して、授業で一部解説をするようにした。使用されている文章やグラフは発達段階に応じて難易度が違うものの、解法に導くためのプロセスを経験するには適切な教材となった。

三 おわりに

これら三年間の取り組みを経て、全国学力・学習状況調査の結果は、無解答率は大幅に減り、平均正答率に上昇傾向が見られる問

題が複数あった。本校の課題である「活用する力」をはぐくもうとするも、一年のスタート時は何をすればよいか見当がつかなかった。指示をしても、「わからん」「おもしろくない」、なかなか取り組もうとしなかった生徒たち。それが、「それくらいならできる」という声に変化し、次第に「おもしろい」「できる」「まかせろ」と、前向きに学習に取り組むようになってきた。

これからも、生徒が本来もつ「わかりたい!」「もっとよいものを作りたい!」「認められたい!」というエネルギーを学習につなげていきたい。そうすることで、生徒一人ひとりがよりよく成長し、自信をもって生きていく力を身につけてほしいと願っている。

うえもり ちぐさ 阪南市立尾崎中学校教諭。